

令和 5 年 4 月 24 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K03060

研究課題名(和文) 多文化社会を創造的に生き抜くためのリーダーシップ養成：「異文化跳躍力」の提案

研究課題名(英文) Educating capacity to facilitate dialogue between those with different backgrounds: Proposing "leadership leaping over different cultures"

研究代表者

田島 充士 (Atsushi, Tajima)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：30515630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：多様な文化的背景を持つ人びとが協働する機会が急増する「多文化社会」化が進む我が国においては、異質な活動文脈や評価の視点を乗り越えて関係を結ぶことができる対話の機会が急増している。本研究では、異質な文化的背景を持つ他者の批判的な意見を丁寧に聴き取り、彼らとの対話に参加すると同時に、自分自身の視点を交えて多様な視点を持つ者とのチーム作りを促進出来るリーダーシップである「異文化跳躍力」の養成について検討したものである。文献研究を通じ異文化跳躍力の定義づけを行い、本能力の養成プログラムを、小学校教諭らとの実践研究を通して開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ロシアの思想家であるバフチンの対話理論および、教育心理学者であるヴィゴツキーの発達理論に関する文献研究を通じ、異文化跳躍力の内実及び養成方法の概要を位置づけた。また大阪市内の小学校教諭らで構成される「新授業デザイン研究会」との共同研究を通じ、異文化跳躍力を養成するための教育プログラムを開発し、「TAKT授業」と命名した。TAKT授業は主に大阪市内の小学校7校において実際に実施され、異文化跳躍力を養成する方法として効果があることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： We are facing the need to educate individuals with strategies for engaging in dialogue that can cross cultural boundaries, to keep working in today's globalized markets in Japan. I developed teaching methods and materials that promote this capacity, under the rubric of "leadership leaping over different cultures (LLDC)"; this system enables dialogue between those from different backgrounds and enables the creation of working teams in Japanese elementary schools. The LLDC content materials were structured by researching related theories and data in educational psychology, and the educational program was organized to develop this capacity through collaborative research with public primary school teachers in Osaka, Japan.

研究分野：教育心理学

キーワード：対話 会話 リーダーシップ 異文化跳躍力 バフチン ヴィゴツキー 小学校 分かったつもり

### 1. 研究開始当初の背景

多様な文化的背景を持つ人びとが同じ職場で働く機会が急増する多文化社会化が進む我が国においては、異なる文化的背景を乗り越えて関係を結ぶことができる諸能力を備えた「グローバル人材」(文部科学省)の養成が急務といえる。本研究では、このグローバル人材を構成する諸能力の中でも基盤的な力として位置づくと考えられる「リーダーシップ」の養成に着目した。

申請者はこれまで、多くの生徒/学生が学校で学んだ知識を、異なる活動文脈を背景とする者に対して十分に説明出来ない状態に陥る傾向にあることを指摘し、これを「分かったつもり」と呼んだ。分かったつもりのまま生徒/学生が学習を終えることは、異なる文化圏を越境した活動を行うグローバル人材を育成すべき学校教育において望ましい状況ではない。

そこでこの分かったつもりを解消するため、大学生を対象に、異なる世界に住む人々との交流機会を設定し、自分自身が学んだ内容を説明してその内容を吟味する課題を設定する教育実践を開発した。これらの実践では学校インターンシップや外国訪問など実際に異世界に住む人々との交流機会を設定したほか、学生自身が他者役割を担い、説明を行う学生に対して質問を行うロールプレイ型交流も導入することで、分かったつもり解消の効果があることを確認した。

以上の研究を進める過程で大阪市内の小学校教諭らで構成される「新授業デザイン研究会」代表の藤倉憲一氏と研究協議を行う機会を得た。また研究会に所属する小学校教諭らとの実践に関する討議を通じ、異世界に住む人々と出会う機会が少ない児童らにとって、分かったつもりの問題を意識することが困難という現状を把握した。さらに実業界における人材研究を進める武元康明氏(Sagasu 株式会社代表取締役)と連携し、今後のグローバル化社会で通用する人材育成の現状についても研究協議を行った。

その結果、実社会において活躍し得る人材の条件として、異質な意見を持つメンバーを一つのチームとしてまとめ得る能力が重要であり、またそうした能力育成が現状の学校教育では十分ではないという課題が明確になった。この能力は、異なる活動文脈を背景とするメンバーが持ち込む複数の異質な視点を理解しつつ、同時にリーダー独自の行動規範も構築し、メンバーに説明を行って新たな実践を創造し得る省察力を発揮することが前提になると考えた。

### 2. 研究の目的

以上の問題意識を基盤として、本研究ではこの能力を「異文化跳躍力」と名づけ、その内実と育成可能性について先行研究を参照し、理論的にモデル化することを目的とした。さらに本モデルを活用し、連携関係にあった大阪市内の小学校を中心に、児童の分かったつもりの解消を通じた異文化跳躍力の養成可能性について検討を行うことも目指した。

### 3. 研究の方法

本研究は、主に文献調査による理論研究と、小学校のフィールドワーク調査および実践開発による実践研究に分けられる。

理論研究は、学習者間の相互交流を通じた認知発達をモデル化した教育心理学の古典といえるロシア(旧ソ連)の教育心理学者 L.S. ヴィゴツキーの発達理論および、異文化を背景とする話者同士の相互接触を通じた社会改革の可能性について論じたロシア(旧ソ連)の文学者 M.M. パフチンの対話理論を参照し、異文化跳躍力の定義および養成方法を論じた。またこれらの理論を引用した最新の実践研究も検討した。さらに M.M. パフチンの対話理論を理解する上で重要とされる「カーニバル」概念を解釈するため、ヨーロッパにおける現地取材も実施した。

実践研究は、「新授業デザイン研究会」代表の藤倉憲一氏および構成メンバーと連携し、異文化跳躍力の具体的な定義について検討を行った。また本能力を養成し得る授業方法についても討議を重ね、実際に、主に大阪市内の複数の小学校において実行した。

さらに日本科学未来館からの依頼を受け、上記の研究成果を踏まえ、異質な視点を持つ訪問者同士が話し合い、学習を深めるための教育プログラム開発への助言も行った。

以上の研究成果については、定期的に武元康明氏にも報告し、実社会から見た教育方法のあり方について協議を重ねた。

#### 4．研究成果

研究成果については、実施した研究プロジェクト別に説明する。

##### (1) バフチンの対話理論に関する検証(理論研究)

異文化跳躍力に関わるコミュニケーションの類型化を行うため、バフチンの対話理論および彼が引用した言語学・文学論の先行研究に関する文献を収集し、分析を行った。分析の結果、話題に関する共有度および、発言者の言表に対する主観的評価の違いにより、異なるコミュニケーションモードが明確になり、それぞれをモデル化した。

まず話題について共有情報が期待される話者間では、多くの言語情報が表現されず、かなり情報が省略された隠語であっても交流が成立する。さらに自分が発言した内容に対し、相手の評価(価値判断)が肯定的であれば相手に受け入れられたと判断し、自らの言表について考慮することもなくなる。このような現象をバフチンは言語認識の「自動化」と呼んだ。本研究ではさらに、この自動化を生じさせる交流を「会話」と呼び、また会話を交わす話者を「仲間」と呼んだ。

一方、話題について共有情報が期待できない話者間では、相手が理解出来るよう、伝えようとする内容を可能な限り詳しく言語化しなければならない。さらに自分が発言した内容に対し、相手の評価が否定的・批判的であれば、自分の見解について弁解するため、自らの言表についてかなり考慮しなければならない。このような現象をバフチンは言語認識の「異化」と呼んだ。本研究ではさらに、この異化を生じさせる交流を「対話」、対話を交わす話者を「他者」と呼んだ。

そして異文化跳躍力とは、他者との対話において発揮され、話者の言語認識の異化を可能とする能力であると位置づけた。逆をいえば、分かったつもりとは、特定の文脈において自動化された言語認識が、異質な視点を持つ他者との対話において、異化されない状態と捉えた。

##### (2) ヴィゴツキーの発達理論に関する検証(理論研究)

異文化跳躍力に該当する、自分の意見とは相容れない意見を持つ他者との対話に参加する能力の発達について、ヴィゴツキーおよび関連文献の収集と分析を行った。

このテーマについて特に検証が必要と考えられたのが、ヴィゴツキーのテキストにみられるドイツの哲学者・ヘーゲルの認識論からの影響である。本研究プロジェクトでは、ヘーゲルの名著『精神現象学』および『小論理学』を主に参照し、ヴィゴツキーのテキストで確認可能な引用箇所と照らし合わせ、異文化跳躍力に応用可能な理論的アイデアを検証した。

検証の結果、ヘーゲルが、文脈依存性の高い言語認識(本研究でいう分かったつもり)から話者が離脱し、異質な見解を持つ他者との協働を可能とする言語認識へと発達する過程を描いていたことが明らかになった。上記のヘーゲルのテキストを引用したヴィゴツキーの発達論も、学習者のこのような成長を射程にし得るものと結論づけた。この検証の観点から、個々人の視点の特殊性が失われることなく、異質な他者との相互関係を結ぶ対話を通し、分かったつもりのような

に特定の文脈にのみ縛られない、新たな知恵を創出できるようになるという成長像が導き出された。そしてこの成長モデルは、本研究の異文化跳躍力に至る道のりであると位置づけた。

### (3) カーニバルに関するフィールド調査(理論研究)

パフチンはヨーロッパにおける中世以来の伝統的な習俗である「カーニバル」を概念化し、異質な意見を持つ他者との対話がもっとも生産的に展開するアリーナを示すものとして重要視した。一方、このカーニバルがなぜ他者との対話を促進する場になるのかは、パフチン自身のテキストにおいて明確な説明は行われてこなかった。民衆文化であるカーニバルに関連する情報が、ヨーロッパの思想家の間では共通事項として見なされ、説明が省略されることがその理由の一つと考えられた。そこで本研究ではカーニバルに関する現地調査を実施し、パフチンの対話理論との関係を示す情報収集を行った。

ドイツおよびスイスで開催された伝統的なカーニバルの現地調査および、カーニバル文化に関する博物館・資料館への訪問調査、さらに現地で入手した資料の分析を通じ明確になったのは、この祝祭期間にのみ登場する「愚者」と呼ばれる非キリスト教徒の仮面を被った批判者が重要な役割を果たすということであった。カーニバルの期間のみに現れる愚者は、滑稽な調子で人々を笑わせながら、日常では不可能な社会批判を展開できた。この中では普段、市民を批判する知識人の立場をひっくり返し、「愚者の王」として彼らを批判するような対話も行われた。そして愚者は、その批判によって罰されることはない「愚者の自由」と呼ばれる権利が保障されていた。さらに中世における学者らの多くは、批判的な社会批評を行うため、宮廷道化などのコメディアンを務める場合も多く、彼らは祝祭外でもこの愚者の自由を享受し、学術活動を行っていた。

本研究では、パフチンはこの愚者の自由をイメージし、愚者を他者の典型例と位置づけ、異質な視点との相互交流が可能な場としてのカーニバルを理想化したのだと分析した。

批判的評価が飛び交う話者らをリードする異文化跳躍力を促進する方法論として、このカーニバルに関する諸議論は有用と考えた。他者による否定的評価は痛みをともなうものであり、対話を促進するだけでなく、暴力的に停止させる可能性も持つ両価的な存在である。ヨーロッパにおいて受け継がれてきた、愚者の自由に関する具体的な要素を検討することで、現代日本の学校教育の中で対話教育を生産的に実施する上での重要な示唆が得られると考えた。

### (4) 異文化跳躍力を養成する授業プログラム開発(実践研究)

パフチンおよびヴィゴツキーが残したテキストに関する理論研究の成果を踏まえ、「新授業デザイン研究会」代表の藤倉憲一氏、研究会に所属する大阪市内の小中学校教諭らおよび、株式会社 Sagasu の武元康明氏と共同で、児童が分かったつもりで陥ることなく学習内容を理解し、異質な見解を持つ他者と共同する資質としての異文化跳躍力を養成するに値する目的の開発とそのプログラムの開発を行った。

その結果、教師や仲間との会話を通じて学んだ知識を児童自身が再構成し、説明を行う過程の重要性が確認された。またこの説明を促進する上で、話題について知識の共有が期待出来ず否定的評価を下す可能性が高い他者を対話の相手とし、他者の困り事を助けるなど学習の目的や動機づけを明確にすることが効果的であると予測された。さらに自分の意見を拡張してくれる存在としてこの他者を信頼する、いわば愛情をもつことも、実際の授業を実施する上で重要であると確認した。そしてこれらの対話を促進する上で、カーニバルにおいて愚者が「自由」を保証される文化が共有されたように、否定的評価を行うことの意義を集団で確認し、また相手に受け入れられやすい批判の仕方やルールなどを学級文化として共有することになった。なお本授業の

遂行にあたり、カーニバルにおいて実際に愚者が行った技法を参考に、児童が他者の立場に立って、仲間の作成した内容を批判的に評価してみるロールプレイなども採用した。

本実践プログラムは、「他者(T1)」「愛情(A)」「会話(K)」「対話(T2)」をとり「TAKT 授業」と名付けた。

#### (5) 異文化跳躍力を養成する TAKT 授業の実施(実践研究)

TAKT のプログラム理念に基づき、異文化跳躍力を養成するための研究授業を 2020 年以降、大阪市内を中心とした 7 校の小学校において順次、実施した。授業は、担当教諭に対し藤倉憲一氏が実施上のサポートを行い、申請者が両者に研究的知見をフィードバックする形で進めた。

その結果、他者のために授業で学んだ内容が役に立つという学習目的とその動機を自覚した子どもたちは、他者の視点を想定したロールプレイ対話などを通じて自主的に学習を自らデザインするようになることが明らかとなった。その中で、他者にも受け入れ可能と思われるプレゼンテーション資料や説明のために使用する実験道具等を独自に制作する者も多くみられた。

この成長過程において、他者および他者の視点を担うクラスメートからの批判に伝えることが出来ず、自らの分かったつもりを露呈する児童も少なからず観察された。しかし学習の目的意識が具体的に明確になるに従い、批判を受けたことについて「自分では気がつかないことを言ってくれてありがたかった」「分からないことが明確にあって助かった」など受け止め、相手に受け入れられる目的内容の解釈を深める様子が観察された。この傾向は教員と児童らが、カーニバルにおける愚者文化のように、批判を行うことの価値を共有することでより強まり、他者への信頼感を増した。この授業をデザインするため、教師の視点を中心とした従来の「指導計画」「指導案」から、実際に対話を行う児童の視点を中心としたものへと変更し、これを「物語」と呼んだ。子どもたちを主人公とした対話展開の予測と支援(物語)として授業をデザインしたことで、上記の成果を得られたものと考えている。

以上のように、TAKT 授業を通じ、分かったつもりにとどまることなく、異質な視点を持つ他者と協働で課題を解決する異文化跳躍力を多くの児童たちが発揮するようになった。

申請者は日本教育心理学会・研究委員会委員として、コロナ状況における対話授業の展開可能性をテーマとした学会企画の公開シンポジウムを 2020・2021・2022 年度に企画し、藤倉憲一氏をはじめ TAKT 授業の実施教員を複数名招聘し、研究成果の一部を発表した。

#### (6) 日本科学未来館における対話型ワークショッププログラムの開発・実施協力(実践研究)

日本科学未来館からの依頼を受け、参加者同士で対話を行うワークショッププログラムへの助言を行った。大阪市内の小学校において並行して実施してきた TAKT 授業の研究成果を踏まえ、開発過程から助言を行った。「雲ができるしくみ」をテーマに、それぞれが抱くイメージの差異を対話を通じて伝え合い、それぞれの意見を調整して課題を解決するプログラムとなった。申請者は本実践を観察し、関連する学術的情報を提供すると共に、小学校における共同研究の視点から、具体的な教授法についても助言を行った。

3 時間程度の比較的短時間で完了するようプログラムされた実践であるが、参加者が異文化跳躍力を発揮し、自他の視点を調整して意見を形成できるようになる成長プロセスがみられるものへと完成させることが出来た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 田島充士	4. 巻 61
2. 論文標題 コロナ状況下において安心感を伴う対話を構築する校長のリーダーシップ 日本教育心理学会公開シンポジウム『withコロナ時代における子どもたちの資質・能力を育成する協働学習の工夫：教科指導と生徒指導を統合するチーム学校の教育実践』（企画：河村茂雄・田島充士・牧郁子）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 323-324
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/arepj.61.314	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Atsushi Tajima	4. 巻 1
2. 論文標題 A sustainable consciousness promoting dialogue with alien others: Bakhtin's views on laughter and Euripides' Tragi-comedy.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Review of Theoretical Psychologies	6. 最初と最後の頁 225-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7146/irtp.v1i2.128022	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田島充士	4. 巻 60
2. 論文標題 コロナ状況下において要請される対話的な学びを支える授業とは：学習心理学の視点から 日本教育心理学会公開シンポジウム：コロナ状況下において学校は対話的な学びをどう展開していくのか：子どもたちの成長を支えるために教育心理学が貢献できることは（企画者：河村茂雄・田島充士・牧郁子）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 223-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/arepj.60.216	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田島充士	4. 巻 増1
2. 論文標題 異質な意見を持つ他者とのコミュニケーションに向かうヴィゴツキーの発達論：ヘーゲルの自己意識論を視点として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ヴィゴツキー学	6. 最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/116814	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Atsushi Tajima	4. 巻 XVII
2. 論文標題 Bakhtin's views on celebrating multiplicity in the culturally diverse world: Nicholas of Cusa's inspirations for interculturalism.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Material of XVII International Bakhtin Conference	6. 最初と最後の頁 79-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Atsushi Tajima	4. 巻 XVII
2. 論文標題 Bakhtin's views of love toward alien others: Generating dialogue beyond critical evaluation from the outside world.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Material of XVII International Bakhtin Conference	6. 最初と最後の頁 261-265
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島充士	4. 巻 14
2. 論文標題 教師・バフチン先生は何を学生たちに教えたのか：対話理論と教育実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 コメント通信	6. 最初と最後の頁 13-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田島充士	4. 巻 19
2. 論文標題 心理臨床場面で生きるバフチン・ダイアログ論：オープンダイアログを考察対象として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 539 - 545
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島充士	4. 巻 23
2. 論文標題 パフチン理論における詩と小説：ソクラテスのダイアログ論およびカーニバルにおける笑い論を中心的な視座として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 総合文化研究	6. 最初と最後の頁 102 - 124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/94360	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島充士	4. 巻 23
2. 論文標題 多文化社会を創造的に生き抜くための異文化跳躍力育成について (藤倉憲一氏(新授業デザイン研究会) × 武元康明氏(半蔵門パートナーズ株式会社)連続講演会)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 総合文化研究	6. 最初と最後の頁 160 - 162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/94360	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島充士	4. 巻 11
2. 論文標題 神話を解体するソクラテスの対話と青年の自己意識 (特集：発達と神話)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ピエリア	6. 最初と最後の頁 8 - 9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島充士	4. 巻 970
2. 論文標題 仲間を創る「会話」とグローバルにつながる「対話」：パフチンの対話理論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 初等教育資料	6. 最初と最後の頁 74-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 田島充士	4. 巻 別巻5
2. 論文標題 話しことば / 書きことばの関係を描くメディア論からみた認知発達：プラトンのアイデア論とヴィゴツキーの概念的思考論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ヴィゴツキー学	6. 最初と最後の頁 63-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田島充士・鎌田紗矢香	4. 巻 別巻5
2. 論文標題 ヴィゴツキー・内言論とグレヴィチ『俳優の創造活動』との関係について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ヴィゴツキー学	6. 最初と最後の頁 163-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島充士・古屋憲章	4. 巻 16
2. 論文標題 教育実践を理解するためのパフチン・ダイアローグ論：豊かな異文化交流の実現 (フォーラム・講演記録)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語文化教育研究	6. 最初と最後の頁 260-278
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計27件 (うち招待講演 16件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 コメント
3. 学会等名 丹下和彦『精神史としてのギリシア悲劇：前5世紀アテナイの知的状況』(企画者：田島充士) 東京外国語大学・総合文化研究所主催講演会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 概念的思考と即自・対他・対自：ヴィゴツキー理論におけるヘーゲルのトリアーデ
3. 学会等名 ヴィゴツキー学
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Atsushi Tajima
2. 発表標題 Bakhtin's ideas of love: Generating dialogue beyond the critical evaluation of others. ( panel discussion on “Love and visual surplus in Bakhtin's dialogism” Moderator: M. Gradovski)
3. 学会等名 XVII International Bakhtin Conference (National Research Ogarev Mordovia State University, Saransk, Russia) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Atsushi Tajima
2. 発表標題 Bakhtin's thought on tolerating and celebrating multiplicity: The relevance of Nicholas of Cusa.
3. 学会等名 XVII International Bakhtin Conference (National Research Ogarev Mordovia State University, Saransk, Russia) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 実社会に資する大学の学びとは
3. 学会等名 2021年度 TAC (多摩アカデミックコンソーシアム) FDシンポジウム『知の越境と対話としてのリベラルアーツ：リベラルアーツと専門の接続』(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 指定討論コメント
3. 学会等名 2021年度日本教育心理学会公開シンポジウム『withコロナ時代における子どもたちの資質・能力を育成する協働学習の工夫』（企画者：日本教育心理学会研究委員会）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 ヨーロッパの習俗における患者とパフチン・カーニバル論：異質な文化的背景を持つ他者とのサステイナブルな対話の実現を目指して
3. 学会等名 文化理解の方法論研究会（MC研）第35回研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 TAKT型実践における教育評価
3. 学会等名 新学習デザイン研究会招待講演（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 世界とつながる「対話」を促進する教育：TAKT型授業の提案
3. 学会等名 石川県能美市立小学校講話（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 大切なことを他者に伝えるための 対話力：「分かったつもり」と「異化」を意識して
3. 学会等名 キヤノン電子株式会社・社内研修講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 指定討論 日本教育心理学会研究委員会企画2020年度公開シンポジウム：コロナ状況下において学校は対話的な学びをどう展開していくのか（企画者：河村茂雄・田島充士・牧郁子）
3. 学会等名 日本教育心理学会・研究委員会企画・公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 コメント 丹下和彦『精神史としてのギリシア悲劇：前5世紀アテナイの知的状況』（企画者：田島充士）
3. 学会等名 東京外国語大学・総合文化研究所主催講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 概念的思考と即自・対他・対自：ヴィゴツキー理論におけるヘーゲルのトリアーデ
3. 学会等名 ヴィゴツキー学協会春の会議
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田島充士・姜英敏
2. 発表標題 葛藤的な異文化コミュニケーションを創造的に展開する演劇手法の可能性：アウグスト・ポアール「フォーラムシアター」の視点から
3. 学会等名 第25回文化理解の方法論研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Atsushi Tajima
2. 発表標題 Laughter as inter-cultural communication: M.M. Bakhtin's dialogism and the methodologies of comedies.
3. 学会等名 International Society for Theoretical Psychology 2019 (Copenhagen, Denmark) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 パフチンとヤクピンスキーのダイアログ論がもたらす教育実践への新たな視点 自主企画シンポジウム『教育実践に資するパフチン・対話理論：ヤクピンスキー『ダイアログのことばについて』を視座に』（企画者：田島充士）
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 対話を実現する越境的マインドセットとしての他者の異質さへのセンシティビティ：パフチン・対話理論の観点から 自主企画シンポジウム『越境的マインドセット創りに向けて』（企画者：野村亮太・丸野俊一）
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 パフチン・ダイアログ論の射程：何が分析可能になるのか
3. 学会等名 『文化心理学セミナー』公開講演会（立命館大学）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 大学の学びは社会に出て役に立つのか：学問知と実践知との緊張関係
3. 学会等名 京都教育大学フォーラム2019『大学と学校現場をつなぐ「プロジェクト型学習」の試み』（京都教育大学） 基調講演（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 世界で活躍するためのコミュニケーション力：言語と文化の心理学
3. 学会等名 公益財団法人日本陸上競技連盟 ダイヤモンドアスリート リーダーシッププログラム 講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 TAKT型授業のモデル：富崎学級（大阪市立堀江小学校）実践を考察対象として
3. 学会等名 新学習デザイン研究会（大阪市立堀江小学校）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 現代の心理学研究におけるパフチン・ダイアログ論の意義：異文化間交流（越境）を志向して
3. 学会等名 乳幼児発達研究会：文化比較・行動比較分科会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 パフチン・ダイアログ論と学校現場：異文化跳躍力を志向して
3. 学会等名 新授業デザイン研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 指定討論 自主シンポジウム『学校と地域の協働は何をもたらすのか？：教育心理学からみた地域と協働する学校の取り組みと成果』（企画：大久保智生）
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 ヴィゴツキー理論との出会い：「分かったつもり」を視座として ヴィゴツキー学協会20周年記念行事『鼎談 ヴィゴツキー、いままでとこれから』
3. 学会等名 ヴィゴツキー学第20回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 コメンテーター
3. 学会等名 講演会『学習者の主体性を促進する教員の権威と権力（講演者：藤倉憲一）』（主催：科学研究費補助金，共催：東京外国語大学総合文化研究所・グローバルキャリアセンター）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田島充士
2. 発表標題 コメンテーター
3. 学会等名 講演会『あなたにとって一番大切なものは何ですか（講演者：武元康明）』（主催：科学研究費補助金，共催：東京外国語大学総合文化研究所・グローバルキャリアセンター）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 田島充士	4. 発行年 2021年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 209
3. 書名 「荒れた」中学校と地域社会を結び生徒の成長を支える学校長のリーダーシップ：パフチン・ダイアローグ論の視点から 時岡晴美・大久保智生・岡田涼・平田俊治（編）『地域と協働する学校：中学校の実践から読み解く思春期の子どもと地域の大人のかかわり』（pp.126-133）	

1. 著者名 田島充士	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 327
3. 書名 対話理論の立場から：パフチンが射程とする内的社会としての意識と異文化間交流 能智正博・大橋靖史（編）『ソーシャル・コンストラクショニズムと対人支援の心理学：理論・研究・実践のために』（pp.64-78）	



1. 著者名 大矢禎一・鎌田正裕ほか（著作編集関係者として参加）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新興出版社啓林館	5. 総ページ数 934
3. 書名 未来へひろがるサイエンス（文部科学省検定済教科書・中学校理科用）	

1. 著者名 ヤクビンスキー, L, P, 桑野隆（監訳）, 田島充士・朝妻恵里（訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 72
3. 書名 ダイアログのことばについて 田島充士（編）『ダイアログのことばとモノログのことば：ヤクビンスキー論からみたバフチンの対話理論』 pp.2-79.	

1. 著者名 田島充士	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 16
3. 書名 バフチン－ヤクビンスキー理論の実践的な解釈可能性：教育実践研究を事例として 田島充士（編）『ダイアログのことばとモノログのことば：ヤクビンスキー論からみたバフチンの対話理論』 pp.244-260	

1. 著者名 田島充士	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 50
3. 書名 ポリフォニー・ホモフォニー論の視点からみたダイアログとモノログ：『ドストエフスキーの詩学』を中心に 田島充士（編）『ダイアログのことばとモノログのことば：ヤクビンスキー論からみたバフチンの対話理論』, pp.192-242.	

1. 著者名 田島充士	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 43
3. 書名 パフチンによるヤクピンスキーのダイアログ論の引用と発展的展開：『小説の言葉』を中心に 田島充士（編）『ダイアログのことばとモノログのことば：ヤクピンスキー論からみたパフチンの対話理論』, pp.148-191.	

1. 著者名 田島充士	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 39
3. 書名 『ダイアログのことばについて』 解題：異質な文脈へ開かれたコミュニケーションの実現を目指して 田島充士（編）『ダイアログのことばとモノログのことば：ヤクピンスキー論からみたパフチンの対話理論』, pp.80-119.	

1. 著者名 Atsushi Tajima	4. 発行年 2018年
2. 出版社 The Learned Society of the John Paul II Catholic University of Lublin	5. 総ページ数 246
3. 書名 Inculcating meta-positions that enhance understanding in conflictive worlds: A study based on Bakhtin's ideas about dialogic estrangement. Puchalska-Wasył, M.M., Oles, P.K., & Hermans, H.J.M. (Eds.) Dialogical self: Inspirations, considerations, and research. pp.95-112	

1. 著者名 田島充士	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 419
3. 書名 一般項目：「科学的概念(p.45)」「権威的な言葉 / 内的説得力のある言葉(pp.91-92)」「社会的言語 / ことばのジャンル(p.146)」「生活的概念(p.174)」「他者 - パフチンにおける - (pp.198-199)」「特権化(p.224)」 能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江靖彦（編）『質的心理学辞典』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------